

庄内の水田農業が変わるにつれて

山形県鶴岡市に向かうべく新潟から汽車に乗った。3月の末で雪はずでに溶けている。見ていたのは海側の景色だけだが、鶴岡に至るまでの田は秋のまま田起こしした様子がない。鶴岡市に入ったと思われる場所でサブソイラーの跡が残る場所が1カ所と、スタブルカルチであろう作業機で秋起こししたと思われる田が2カ所くらい。これが日本海側の水田農業だ。

全国どこでもプラウの普及率は限定的だが、秋起こししている場所は少なくない。こうした積雪地帯の人に秋起こししない理由を聞くと、秋起こしすると春に田が乾かないという。そもそも田が排水不良になっているからではないのか。

雪国でも秋起こししてぬかるみにならないという読者も少なくない。長年の浅い耕起と機械による踏圧の結果の排水不良がそういう思い込みを積雪地帯に定着させ、秋起こしだけでなく畑作技術体系導入を妨げているのではないだろうか。また、稲刈りが終わるころはもう時雨時期で田に入れないという人もい

る。しかし、1作だけでも無代かき

での稲作をすれば田の乾きは圧倒的に良くなり、秋起こしも不可能ではなくなるのではないだろうか。

3月26日、山形大学農学部食料自給圏「スマート・テロワール」形成講座主催による「庄内地域における水田畑地化に向けた勉強会」にアドバイザーとして参加すべく鶴岡市に向かった。

勉強会には鶴岡市でスマート・テロワール構築に取り組む関係者だけでなく、鶴岡市内の若手水田農業経営者約10名をはじめ、行政や農業関連事業者など約50名が参加し、講師として招聘されたスガノ農機株の井島創氏と石垣秀樹氏の二人が土について、そしてなぜ耕すかを井島氏が、石垣氏は乾田直播の技術を含む畑作技術体系に関して解説した。全国の篤農家たちとの出会いを通して得た知識と経験をもとにした二人の実践的な解説はきつと参加者たちに勇気を与えたはずだ。

山形大学農学部食料自給圏「スマート・テロワール」形成講座では、庄内地域における畑作農家と畜産農家との耕畜連携の実証実験を行っている。この取り組みでは、耕作放棄が進む中山間エリアの水田や余剰

水田を畑地化し、高品質・多収量の畑作物（大豆、麦、馬鈴薯、飼料用子実トウモロコシ）の生産を目指しているという。

スマート・テロワールの提唱者である故・松尾雅彦氏は、すでに日本人の食文化が畑作文化のそれに変わっているのにもかかわらず、農業界は供給過剰になっていても稲作と水田に固執している、その克服こそが日本農業の最大の課題であるとともに地域内での耕畜連携や地域食料自給を進めるスマート・テロワール構築の最大のネックになっていると指摘していた。その意識改革を進めるとともに、畑作技術体系の水田への導入と水田の畑地化を目的として今回の勉強会は行なわれた。

5月に改めてスガノの井島氏たちに来てもらって実演会を開く。参加した若い農業経営者たちは子実トウモロコシの作付けも含め意欲的に取り組もうとしている。

昔から村を変えるのは「若者、よそ者、馬鹿者」だと言われてきた。その通りだ。過去の経験や地域の習慣に囚われずに未来へ向けてチャレンジする彼ら。高齢化の進行を農業界はほやくが、それこそが日本の農業や農村を変える大きなチャンスなのである。庄内の水田農業も今、大きく変わろうとしている。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。